

A・MUSEUM

vol.78
[2014.3.8]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



新緑の八溝山（第2回「いばらきの自然環境フォトコンテスト」 最優秀作品 撮影：宮崎利安）

ひとと自然が織りなす風景

当館は今年の11月で開館20周年を迎えます。この記念の年の7月から、企画展「新茨城風土記ーひとと自然のものがたりー」を開催し、茨城県内各地での人と自然が織りなす物語を紹介します。

この紙面でも5回シリーズで、人と自然が深く関わってつくられた茨城県の絶景を紹介します。第1回は新緑の八溝山（標高1022m）です。写真の濃い緑は人工的に植林されたスギ林、さまざまな色に染められた新緑の部分はヤマザクラなどの広葉樹の自然林です。茨城県は八溝山が最高峰で高い山がないため、人工林の割合が全国的にみても高く、県内の人工林と自然林の割合は、人工林が全体の2/3を占めます。間伐や枝打ちなど適切な管理が施された人工林は写真のように大変美しい森林となっています。（企画課 小幡和男）



人工林の間伐作業のようす（写真提供：県立大子清流高等学校）

**第60回
企画展**

サバンナからのメッセージ

- アフリカの自然とその保全 -
Messages from the Savanna - African Wildlife and its Conservation -

日本の国土のじつに80倍ほどもある大陸、それがアフリカです。そのため自然環境も、海岸から標高5,000mを超える高山帯まで、また砂漠から熱帯林までと極めて多様で、それぞれの環境ごとにユニークな生物がみられます。今回の企画展では、アフリカ南部および東部の、サバンナとよばれる植生帯に焦点をあてて、そこで暮らす野生生物に迫ります。サバンナは「木の育たない地域」という意味をもち、熱帯や亜熱帯地方の草原が広範囲にみられる地域です。まさに皆さんが思い浮かべる、ライオン、チータ、ゾウ、サイ、キリンといった動物が闊歩する世界といえます。

企画展ではサバンナにみられる動植物を、豊富な標本や生体で示します。特に、哺乳類と鳥類剥製を一堂に集めた展示室中央のパレード展示は見応え十分で

す。国立科学博物館が所蔵する、世界有数の品質を誇るヨシモト・コレクション（哺乳類剥製）も多数展示されます。また、ザンビア共和国の南ルアンゴ国立公園に関する紹介も随所で行われますが、ザンビア野生生物公社（Zambia Wildlife Authority）から多くの情報提供をいただいたほか、実際に当館職員による現地調査により収集した植物標本も展示されます。

さらに、こうした多様で希有な自然環境を保全するための取り組みや、密猟、農業被害、人身事故といった人間との軋轢の問題についても触れ、解決のための挑戦も紹介します。遠いアフリカを訪問することは簡単ではありませんが、今回の企画展を通して、アフリカの自然とそこに生活する人々に思いを馳せていただければ幸いです。（教育課 山崎晃司）



ライオンの親子（ザンビア・南ルアンゴ国立公園）



アフリカゾウの群れ（ケニア・東ツアボ国立公園）

展示構成

- アフリカの動物大パレード! - ヨシモト・コレクションを中心に -
- サバンナとは何か
- アフリカにすむ人ターサン・マサイ・バントウ系 -
- 社会性ネコ類 ライオンの世界
- サバンナの生き証人 バオバブ
- アフリカの代表的な国立公園
- アフリカの動物 - フラミンゴ・タランチュラ・シクリッド -
- サバンナの植物たちとリトープス
- 自然の恵み スイカの栽培 昆虫食
- 密猟・野生生物による被害
- アフリカの自然を守る



サバンナシマウマの群れ（ケニア・ナイロビ国立公園）

会 期 2014年3月8日(土)～2014年6月15日(日)

3月8日は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00（入館は16:30まで）

休 館 日 毎週月曜日

※5月5日(月)、5月6日(火)は開館し、5月7日(水)が休館となります。

●記念講演会「動物写真家がとらえたアフリカ」

日 時 3月8日(土) 13:30～15:30

場 所 博物館内

講 師 前川貴行氏（動物写真家・日経ナショナルジオグラフィック写真賞2012グランプリ受賞）

対 象 中学生以上

定 員 280名（先着順）

●記念観察会「動物園の中のアフリカ」

日 時 3月23日(日) 10:00～12:00

場 所 東京都多摩動物公園（現地集合）

対 象 小学生以上（小学生は保護者同伴）

定 員 30名（抽選）

参加費 保険料 1人につき50円

●記念講座「サバンナ・ザンビア丸かじり」

日 時 4月29日(火・祝) 13:30～15:00

場 所 博物館内

対 象 中学生以上

定 員 40名（先着順）

博物館と展示解説員

展示解説員 4

シリーズでお伝えしてきた展示解説員（ミュージアムコンパニオン。以下MC）について、今回は、まとめとして博物館のスタッフとしてのMCの活躍に焦点を当ててみます。

当館は、県内の豊かな自然を中心に、さまざまな資料や情報を集め、それらについて研究し、わかったことを広く公開し、多くの方々に知っていただくことを目的に活動しています。職員は誰もがこの仕事の一端を担っていますが、年間約40万人の来館者全員に接するMCの存在は重要です。お客様が来館された際、たくさん展示物を前に、注目すべきポイントや、みただけではわからない展示物の情報など、いろいろ知りたいことがあると思います。そんなときに、MCによるガイドツアーなどの展示解説は、より深く博物館を知るための大切なきっかけとなることでしょう。

MCの業務は展示解説だけではなくありません。お客様が入館する際の手続きや館内施設の案内なども大切な業務です。どんなときでもお客様の声に耳を傾け、おもてなしの心で接することを忘れません。エントランスで、どのチケットを購入したらよいか迷っているときや、館内で食事をする場所を探しているときなど、困っているときにMCはすぐにかけつけます。



MCの朝は元気な発声練習から始まる

このように、MCはいつもお客様に接する最前線にいます。22名のMC全員がそれぞれの能力を発揮するためには、日々の研鑽とチームワークがとても大切です。

そこでMCに、うれしかったことややりがいを感じたこと、毎日の勤務で気をつけていることについて聞いてみました。「展示解説や施設の案内を通じて、お客様に感謝されたときにやりがいを感じます。先輩のMCに指導を受けながら、自分のできることがだんだんと増えていると実感できるとうれしいです。」「ガイドツアーを通じて、お客様に楽しんでいただけるように頑張っています。そして、笑顔でお帰りになる姿をみるとうれしくなります。」「私たちには毎日同じ職場での繰り返しの仕事でも、お客様にとっては一生に一度しかない一日かもしれないという一期一会の気持ちで、業務にあたっています。また、仲間のMCが、はつらつと仕事に取り組んでいる姿をみると頼もしくなります。」「これらのコメントには、MCとしての使命感が込められています。

MC一人ひとりが、お客様が博物館で充実した時間を過ごせるように力を合わせて頑張っています。これからもMCの活躍にご期待ください。

（教育課 潮田好弘）



エントランスでの案内の様子

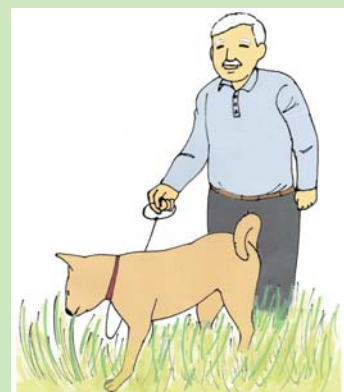
若草

春を迎え、我が家の庭にも、長く厳しい冬の間に枯れてしまった芝生の間から瑞々しい青草が萌えてきています。狭い庭ですが、夏場にはあんなに手こずらされた雑草も、この季節には新鮮で美しく、雑草とよびには申し訳なく、その名を知らないことを恥ずかしく思います。室内で飼育している我が家の小犬も、庭を駆け回り早春の息吹を楽しみ、そして時々立ち止まり青草を食べています。草を食べるのは、イヌに限らずネ

コにもあり、ペットショップではイネ科のキャットグラスも売られています。なぜ食肉類に属するこれらの動物たちが草を食べるのかはよくわかっていませんが、腸内の毛玉を吐くためとか、ビタミンCの補給のためなどの説もあります。

人間との付き合いが極めて長いイヌやネコにもわからないことがたくさんあります。散歩の道すがら草を食べはじめたら驚かず春の若草の味を存分に楽しませてあげてください。

コラム by director SUGAYA



イラスト：上脇田直子（ミュージアムコンパニオン）

学校移動博物館について

研究ノート 1

当館では、平成17年度から平成24年度まで、県内8つの小学校の協力のもと、地域を基盤とした自然に関する学習の場を提供することを目的として、学校の空き教室などを利用してミニ博物館を整備する「スクールミュージアム整備事業」を展開してきました。そして今年度から、遠隔地の学校や特別支援学校など来館が難しい方々を中心に、より多くの子どもたちに博物館の資料にふれる機会をもってもらいたいと考え、県内の小中学校や特別支援学校の空き教室などを利用して移動博物館を開催する「学校移動博物館スクールミュージアム号」を開始しました。

展示のテーマを「身近な自然」とし、茨城県内でみられる昆虫標本や動物の剥製、季節の植物標本、化石標本やレプリカなどの資料を展示内容としました。なかでも、平成23年に当館のジュニア学芸員が県内で発見した古代ゾウ「ステゴロフォドン」の産状化石のレプリカは、目玉のひとつです。また、小中学校で行う地層の学習など、普段はなかなか実物を見ることができない学習の補助となる展示内容としました。展示の詳細については、開催校と打ち合わせを行い、学校の希望や地域の特徴に合った資料を展示しました。たとえば、霞ヶ浦の近くにある小学校では、そこに生

息する魚類と、それをエサとする鳥類の剥製を展示しました。また、児童生徒が当館職員の解説を聞きながら学習できるワークシートを用意しました。

今年度は当初、年間5校開催の予定で募集を開始しましたが、予想以上にたくさんの応募をいただき、16校で実施することになりました。北茨城市立華川小学校では、通常1日で設営・展示・撤収まで行つところ、遠隔地のため、3日間の展示期間としました。子どもたちは、体育館の半分ほどに広げた展示物を、見学したり、体験したりしました。特に、恐竜の足跡のレプリカが人気で、小さい児童はあしあとのなかに寝そべって、「すごく大きい。」と楽しんでいました。この地域の子どもたちにとって当館は遠く、あまり訪れる機会のない場所ですが、先生方から「博物館に興味をもつとともに、楽しみながら自然の学習をするよい機会になった」という言葉をいただきました。

来年度からは、開催校の会場を開放し、地域の方々にも移動博物館を見学していただけるようにしたいと考えています。また、学校からのさまざまなニーズに応えることができるよう、展示のテーマを増やしていこうと考えています。4月から5月にかけて募集を行いますので、ぜひご応募ください。(教育課 潮田好弘)



展示は一教室分



熱心に職員の話に耳を傾ける児童

春を待つ植物・ロゼット

春はどこからやってくるのでしょうか。まだ寒さが残る日でも地面に目をやると、春を待つ生きものたちの姿を発見することができます。

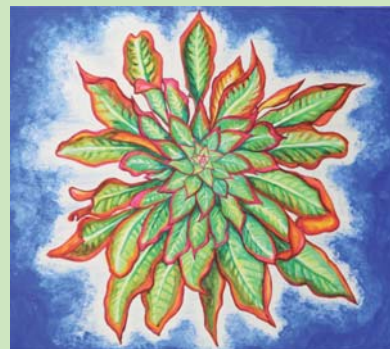
地表の植物をみてみましょう。タンポポやハルジオン、メマツヨイグサはロゼットで冬を越します。ロゼットとは、植物の葉がバラの花のように地面に放射状に広がった形をいいます。この形態は、地面にはりついているので冷たい風の日でも影響を受けません。また、暖かい日には

太陽に暖められた地温を吸収することができます。

寒さに適応し、冬を越したロゼットは、春になり暖かくなるとほかの植物が芽を出す前にいち早く茎を伸ばします。まだ寒い冬のうちから春の準備をしているので、真っ先にスタートを切って成長できるのです。私も彼らを見習って、より大きく成長できるよう、早めに新年度の準備をはじめようと思います。

(ミュージアムコンパニオン 豊田朝美)

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー



メマツヨイグサのロゼット

イラスト：豊田朝美

市民参加によるマダラコウラナメクジの分布調査

研究ノート 2

マダラコウラナメクジとは？

マダラコウラナメクジは、コウラナメクジ科に属する体長10cmを超えるヒョウ柄模様のナメクジです。雌雄同体で、木の枝にぶら下がって粘液を出しながら交尾するという独特の習性をもつことからマスコミヤ本などで紹介されることもあります。もともとはヨーロッパ原産ですが、現在では、アメリカ、オーストラリア、南アフリカなどに生息域が広がっています。国内では、土浦市で2006年にはじめて目撃され、翌年、野生化した個体も採集されました。

茨城県における分布

当館では、2010年9月に石岡市でマダラコウラナメクジとその卵塊を発見したのを機に、2011～2012年にかけて、小学校や当館の来館者の協力を得て、茨城県における分布調査を実施しました。その結果、土浦市、石岡市、かすみがうら市、小美玉市、鉾田市、常



2011～2012年の調査に基づく茨城県におけるマダラコウラナメクジの分布図

総市の6市の合計14か所から標本と採集データが得られ、特に石岡市南部と小美玉市南部を中心に分布が集中していることが明らかになりました。また、聞き取り調査では、土浦市で2000年代はじめて目撃情報があり、この種がだいぶ以前から茨城県内に定着していたことがわかりました。茨城県への移入経路についてははっきりしませんが、販売されている園芸植物などでみつまっていることから、それらと一緒に運び込まれた可能性もあると考えられます。

農作物などへの被害

本調査では、マダラコウラナメクジがペットのエサや落ちたカキの実のほか、インゲン豆などを食しているのが目撃されています。また、現地調査で観葉植物のウチワサボテンやヒラタケが被害されているのを確認しています。現在、この種は茨城県のほか、福島県や長野県などでもみつっていますが、分布の拡大に伴い、農作物などへの被害が懸念されます。当館では今後も引き続き、茨城県内におけるこの種の生息状況を調べていく予定です。（資料課 池澤広美）

※本研究は学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)，No. 23501229）によって実施されました。



被害された栽培ヒラタケ(2010. 11. 13, 石岡市東田中) (撮影:矢野徳也)

クサフグ

クサフグは青森県から沖縄県の沿岸や汽水域に生息しています。全長25cm程まで成長し、フグ独特の丸い体型をしています。背には白い小斑点があり、胸ビレと背ビレのつけ根に大きい黒斑点があるのが特徴です。また、かわいらしい見た目からは想像できませんが、内臓や皮に猛毒をもっています。

クサフグは、尾ビレをあまり使わず、背ビレや尻ビレを動かし小回りのきく器用な泳ぎ方をします。尾ビレを大き

く動かして泳ぐマダイなどに比べ、スピードを出して泳ぐことができないため、敵が現れてもすぐに逃げるのができません。このためクサフグは、砂に潜って身を守る習性があります。

当館のクサフグは、エサの時間になると我先にと近づいてきます。口のなかには4枚の頑丈な歯があり、大きなエサでも突ついて食べてしまいます。お腹がはち切れそうになるまで食べ続け、体のバランスを一生懸命泳ぎでコントロールしています。そんな姿はい

おさかな通信

つみても心が和みます。来館された際は、ぜひ注目してください。

(水系担当 武藤 唯)



クサフグ

東京大学より寄贈された昭和初期のコケ標本

収蔵品紹介

2011年11月、東京大学から1930年代に採集された貴重なコケの標本が寄贈されました。この標本は、茨城大学名誉教授で地衣類研究者の佐藤正己博士が東京大学在籍時に保管していたものです。当館には1万点を超える佐藤博士の地衣類コレクションが収蔵されていることから、今回東京大学で発見されたコケ標本も当館にその一部が寄贈されることになりました。

寄贈された124点の標本は1934年から37年に採集されたもので、採集地は北海道の利尻島や小笠原諸島まで広範囲にわたります。しかし、ほとんどの標本には採集者が書かれていません。調べていくうちに、これらは佐藤博士と同時期に東京大学に所属し、コケを研究していた辻部正信氏が採集した可能性が高いことがわかりました。辻部氏が書いた論文のなかに、自身

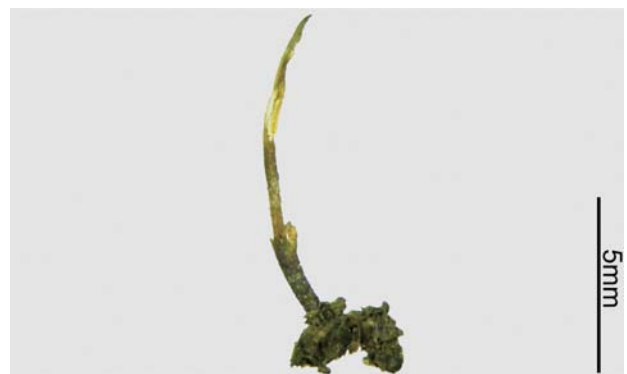
が採集した標本として寄贈標本が引用されていたことなどがその理由です。

このなかから興味深い標本がみつかりました。環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅰ類に指定されているキノボリツノゴケです。キノボリツノゴケの生育地の北限は千葉県とされており、それは1896年に採集された1点の標本にもとづいていました。その後キノボリツノゴケは千葉県から絶滅したと考えられていましたが、寄贈標本のなかから1937年に採集された標本がみつかり、少なくともその頃まで千葉県にキノボリツノゴケが生育していたことが明らかになりました。

残念なことに、辻部氏は1944年に30才の若さで亡くなりました。残されたこれらの標本を、今後も大切に研究していきたいと思います。（資料課 鷗沢美穂子）



寄贈された標本



寄贈標本からみつかったキノボリツノゴケ

ヒメアマナ

季節の話題

春の小貝川河川敷にみられる希少な植物に「ヒメアマナ」があります。ヒメアマナは湿った原野に生えるユリ科の多年草です。護岸工事などによる生育地の減少で激減し、環境省は絶滅危惧ⅠB類、茨城県は絶滅危惧ⅠA類に指定しています。

昭和45年発行の「茨城の植物」では、茨城県内でヒメアマナの採集記録はないとされていますが、昭和56年発行の「茨城県植物誌」には、小貝川の河原にわずかに生育することが記されています。茨城県のヒメアマナは昭和後期に発見されるまで、人目につかずひっそりと生きていた植物といえます。今でも、小貝川は県内唯一のヒメアマナ生育地となっています。

ヒメアマナはいわゆる春植物で、春先に一気に成長、開花し、種子をつくりまわります。その後地上部は枯れ、地中の鱗茎は5月末から翌春まで休眠します。そのため、春にいかに早く成長し種子をつくるかが生き残りの鍵となります。しかし、河川敷にはヨシやオギなどヒメアマナより大きく成長する植物たちもみられます。

昔は河川氾濫などのかく乱で植物たちが新たに成

長するチャンスが巡ってきましたが、今ではこうしたかく乱が起こりにくくなっています。そのため、小貝川河川敷では、1月頃に野焼きが行われています。

野焼きにより、地表は一瞬にして焼け野原となりますが、地中には熱は届かず、種子や鱗茎などは生き残ります。野焼きの後は、河川氾濫後と同様に地表に十分な光が届くようになり、ヒメアマナたちの成長を促すことができるのです。（資料課 宮本卓也）



ヒメアマナ

トピックス

○入館者850万人を達成！！

2013年12月7日（土）に、当館の入館者が850万人に達しました。1994年11月13日に開館してから、19年1か月での達成となりました。

記念すべき850万人目となったのは、常総市から親子3人で来館した小学3年生、松崎広空くん。当日は、850万人達成の一報を受けて駆けつけてくださった来賓の方々とともに、記念式典を行いました。式典では、広空くんをはじめとした参加者全員で記念のくす玉を割り、記念入館証と記念品が館長から広空くんに贈られました。松崎さん親子は当館の年間パスポートを利用し、夏休みなどに家族でよく訪れるとのこと。広空くんは自分が850万人目だと知らされて、「驚いたがうれしかった。恐竜は大きくてカッコいい。特にティラノサウルスが大好き。」と笑顔を浮かべていました。

当館は、開館以来毎年約40万人のお客様にご来館いただいております。おかげさまで2014年の今年は開館20周年を迎えます。これからも、何度来ても楽しい博物館づくりを目指していきますので、変わらぬご愛顧をお願いいたします。（企画課 鈴木 肇）



記念式典のようす

○新しい展示が加わりました！

第59回企画展「ジオ・トラベル in いばらき」で展示されていた巨大なムカシオオホホジロザメの模型をご覧になりましたか。これは北茨城市でみつかった歯群化石をもとに製作したもので、ほぼ実物大です。この模型が、第2展示室出口付近に移設されました。第2展示室には北茨城市の五浦海岸で産出したムカシオオホホジロザメの歯化石も展示されています。全身模型でその大きさを実感するとともに、より理解を深めていただけたと思います。

ディスカバリープレイスでは、映像展示をリニューアルしました。博物館に隣接する菅生沼の自然に関する2本の映像をご覧になれます。また、部門展示のコーナーでは、3つの展示ケースを新設しました。ケースには、常陸大宮市で産出した紫水晶、絶滅危惧種のコジュリンやタチスミレを展示しています。大変

貴重な標本ですが、これまでほかの標本と一緒に展示され見過ごされがちだった標本たちです。

リニューアルした展示で、標本のもつ迫力や、身近な自然の魅力を改めて感じていただければ幸いです。

（資料課 小池 渉・鶴沢美穂子）



移設されたムカシオオホホジロザメ全身模型

○茨城県天心記念五浦美術館でギャラリートークを行いました

2月11日、県天心記念五浦美術館の企画展「花が咲き、鳥は遊ぶ」において、美術館・博物館のコラボレーション事業となる、ギャラリートークを実施しました。内容は、展示されている花鳥画に描かれた植物や野鳥について、その名称や生態を自然博物館の視点で解説するというものです。今回は、事前に美術館から花鳥画の画像を入手し、各作品に描かれている植物や野鳥の確認をしました。しかし実際の作品を目の当たりにすると、野鳥の羽毛や植物の葉脈など、実に細かいところまで描かれており、画像からでは伝わらない、色彩の美しさや精緻に描かれたようすに圧倒されました。植物や野鳥の自然の中でのようすが分かるような解説に心がけたことで、参加された皆さんから、「いつもと違う視点で作品鑑賞ができ、その奥深さを改めて感じた。」「描かれている野鳥を自然の中でみたくなった。」などの感想をいただきました。これを機に美術館・博物館の結びつきが強まり、お互いの専門分野を利活用できる連携事業を展開したいと考えています。

（教育課 石田容之）



ギャラリートークのようす

旅する標本



カルノタウルスの全身骨格標本(複製)

博物館にはたくさんの標本が展示してあります。当館でも約3,000点の標本を常設展示で見ることが出来ます。しかし、博物館が所蔵している標本はそれだけではなく、当館の収蔵庫には約340,000点もの標本が保管されています。地域の自然資料を中心に、貴重な研究資料として、毎年多くの標本が収集されています。これらを積極的に活用するために、ほかの博物館に貸し出したり、移動博物館で紹介したりしています。同じ標本が北へ、南へ、いってみれば「標本が旅をする」のです。例えば、当館の地学収蔵庫にある標本の中で一番の旅人は「カルノタウルス」の全身骨格標本(複製)です。カルノタウルスはアルゼンチンで発見された恐竜で、中生代白亜紀に生息していた全長7.5mの獣脚類です。日本で全身骨格標本があるのは当館だけです。今年度は長崎県、昨年度は青森県や千葉県、昨年度は北海道と毎年遠くまで旅しています。ほかにもトリケラトプスやプシッタコサウルスなども全国各



地学収蔵庫のようす

地を旅しています。

また、当館が企画展を開催する際に、ほかの博物館から標本を借用することもあり、ときには海外のアメリカや中国などからはるばるやってくるものもあります。来年度の企画展では、北海道の網走市から「マンモス」の復元模型が当館にやってくる予定です。

標本は日本中を旅して、たくさんの人に出会い、喜びと感動を与えています。これからも、収蔵標本をたくさんの人にみていただけるように、管理、保存、活用していきたいと考えています。(資料課 諸橋靖子)

編集後記

2014年。いよいよこの年を迎えました。11月に当館は満20歳になります。当館は、誕生から今日にいたるまで、お客様をはじめスタッフなど、多くの方々に支えられ、見守られながら成長してきました。私もその一端に加わり、この記念すべき年を迎えられることを思うと、身の引き締まる思いです。記念の企画展や、イベントなどを開催しますので、ぜひ皆様も博物館に足をお運びください。(Y.U)

交通案内



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- ＜鉄道・バスご利用の場合＞
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- 東武野田線愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- ※事前に発車時刻等をご確認下さい。



【開館時間】

9:30から17:00まで(入館は16:30まで)
※ベット、遊具、テーブル、椅子及びテント等のお持ち込みはご遠慮ください。

【休館日】

●毎週月曜日
※5月5日(月)、5月6日(火)は開館し、5月7日(水)が休館となります。
※6月23日(月)～6月28日(土)は館内整理のため休館となります。

サイエンスデー(無料入館日)のお知らせ

自然科学に親しんでいただくために、次の日はどなたでも無料で入館できます。楽しいイベントなどをご用意しますので、ぜひご来館ください。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月21日(春分の日)

